



二 道路にて

「ふう。相手は逃げたでござるか。残念ではござるが、仕方がない。今日は、勘弁してやるでござる」

落武者は立ち上がると、膝に付着した土を払う。そして、ゆっくりと周囲を見渡す。ここは道路工事中のため、辺り一面は土や草むらだが、道路沿いには何軒もの家が建っていた。

「おかしいでござるな。確か、拙者が戦っていた時には辺り一面は草むらであったはずでござるが。それに、家の形も四角から丸いのから、先がとがっているのやら、いろんな形があるでござる」

落武者は工事現場を抜けるとアスファルト道路に出た。道路には車が行き交っていた。

「やや。あれは何でござるか。先ほどのブルドーザーとかいう牛の仲間ではござるか。それにしてもすごい速さでござるな。走っている脚は棒じゃなくて、丸く見えるでござる。やはり、牛というよりも、馬でござるな。おお、馬の体の中に人がいるでござる。さっきの失礼な奴が言っていたように、馬に乗るのにも免許皆伝がいるのでござるな」

車が信号で止まった。その上には信号機があった。

「やや。あの三つの目玉は何でござるか。赤に黄に青でござるな。今は、赤色が光っているように見えるでござる。あの赤色を見て、馬たちが止まっているのでござるな。あの赤色には、馬が走らすのをやめさせる何か忍術のような力があるのでござるか。やや、今度は、赤色が光るのをやめ、青色が光り出したでござる。なんと、並んでいる馬たちが一斉に走り出したでござる。あの青色には、馬たちを走らす力があるのでござるな。やや、今度は、青色が消え、黄色が光っているでござる。馬たちがより早く走る様になったでござる。黄色には青色よりも馬たちをもっと早く走らす力が秘められているのでござるな。世にも恐ろしい時代でござる。だが、そんな忍術もわしには効かぬでござる。わしはこうして立ったままでござる」

信号の前で立ち尽くす落武者。

「しかし、本当に暑いでござる。体中から汗が噴き出るでござる。まあ、おかげでさっきかけられたしよんべんも汗で流れてよかったでござる。それでも、吹き出した汗は、しよんべんと同じような臭いでござるなあ」

その汗も落武者の皮膚を突き刺すような太陽の熱ですぐに乾く。乾いた皮膚の下から、太陽の光に絞り出されるかのように、また、汗が吹き出す。そして、乾く。落武者は自分の体が干からびていくのが感じられた。

「汗臭いだけならまだしも、このままでは元の体に・・・」と言い終わらないうちに、落武者は急にしゃがみこむ。目の前が暗くなったのだ。

「知らないうちに、さっきのあやつの忍術にかかったのか」と地面にそのまま倒れた。

急ブレーキの音がした。

「大丈夫ですか」

車から若い男が降りてきた。男の名は坂本虎雄と言った。父親が坂本龍馬のファンで、折角、坂本という姓なので、龍馬に匹敵するように虎雄と名付けたのであった。虎雄は、残念ながら、名

前負けしたのか、日本を洗濯するまではいかなかった。だけど、この住んでいる街を少しでも元気づけようと、地元のタウン誌に就職したのであった。坂本はそのタウン誌の営業からちょうど事務所に帰る途中だった。信号の側で誰かがうずくまっているのを見て、車を止めたのだった。

「水。水」

宮本はうわ言のように水を求め、手を伸ばし、空気中の湿気を掴んでは口の中に放り込んでいる。坂本は一瞬立ち止まり、二、三步、後ろに下がる。目の前にしゃがみ込んでいるのは、体中に矢がささり、髪はざんばら姿の男。まるで戦国時代の落武者だ。この暑さで、体だけでなく頭もやられたのだ。関わらない方がいいのではないか。宮本は助けようか、このまま見過ごそうか、躊躇する。それでも、いや、この近くで時代劇のロケでもあったのだろうと思い直し、再度、落武者に近づく。

「みず。みず」

宮本は男に気が付くと、井戸を見つけたかのように手を伸ばす。この暑さだ。熱中症にかかったのだろう。坂本は辺りを見回し、自動販売機を探す。だが、あいにく近くにはない。確か、この近くにコンビニがあったはずだ。そこまで水を買うに行くよりもこの男を車に乗せて、コンビニまで連れていった方が早い。坂本はそう判断すると、「水を買うに行きます。この車に乗ってください」と落武者を車の助手席に座らせる。さっき見た時よりも男の体が小さくなっているような気がしたが、そんなはずはない、気のせいだろうと思い直す。

「さあ、行きますよ」

鈴木は落武者を車に乗せると、アクセルを踏んだ。信号だ。黄色が点滅している。止まらなきゃと思いながら、すぐ横で「水、水」とうわ言を言い続けている男を見て、ブレーキからアクセルに踏み変える。

「もうすぐですよ」助手席に声を掛ける。チラッと横眼で見ると男は座席シートの中でまるまっている。明らかに体が小さくなっている。やばい。体中から水分が蒸発して、ひからびているのだ。このままではミイラになるのか。果たして、生きている人間がそんなふうになるのか。疑問が生じるが、今は、水を欲しがるとこの落武者を助けることが先決だ。

坂本はアクセルを最大限に踏みこむ。コンビニの駐車場に駐車止めに向かって前から突っ込む。そのまま店舗内に飛び込み、飲み物のショーケースからペットボトルの水を三本掴むと、レジに走る。お金を払うのももどかしく思いながら、袋に入れずにそのまま掴むと、車に向かって走りながら、ペットボトルの蓋を開ける。助手席のドアを開け「水ですよ。水」とペットボトルを差し出す。

「あれ」そこには男はいなかった。代わりに石が三つ重なっている。あの落武者が持っていたものか。

「一体、どこに行ったんだ」鈴木はコンビニの駐車場を見渡す。そこには落武者の姿はない。

「せつかく、水を買ってきたのに」鈴木は車の運転席に座った。その時、「水を。水を」とかすかな声がある。落武者の声だ。鈴木は後部座席を見る。そこにも落武者の姿はない。

「ここ。ここでごぎる」声は三段重ねの石から発していた。うそ。まさか。石が声を出すなんて。自分も熱中症にかかったのか。クーラーのきいた部屋の中にも熱中症にかかることは

ある。いわんや鉄の塊である車の中なら、なおさらだ。

「水を・・・かけて・・・欲しいで・・・ござる」聞こえるか聞こえないかのかぼそい声で石が頼んでいる。確かに石がしゃべっている。自分は重症だ。熱中症だ。落武者よりも、自分の頭を冷やさないといけない。坂本はペットボトルの水を自分の頭ろ石にも掛けた。

ぶるるる。ぶるるる。鈴木が髪にかかった水を切るために頭を振ると同時に、同じように頭を振る音がした。

「かたじけないでござる」助手席には先ほどの落武者が座っていた。だが幼児程度の大きさだ。そんなバカな。見間違いか。鈴木はもう一度、自分の頭に水を掛けた。そして、再度、助手席に落武者が座っているのを確認した。

「もう少し、もう少し水が欲しいでござる」坂本は残っていたもう一本のペットボトルを隣に座っている幼児に渡した。

「かたじけない。これは透明な竹筒でござるな」幼児はぐいぐいと水を飲み干した。それにつれて、体が大きくなって、最初に助手席に座らせた時と同じ落武者の大きさに戻った。人間の体って、スポンジが水を吸収するみたいに、こんなにも膨れるものなのか。

坂本は自分の手、足、お腹を見る。仕事が終わって家に帰って来た時は、お腹はひっこんでいるが、缶ビールを二本立て続けに飲むと、お腹はぼっこりと小山のようになる。それでも、隣にいる落武者ほど、幼児が大人になるほど膨張することはない。それに、あの三つ重なった石は一体、どこにいったんだ。隣の落武者の足下には落ちていない。やはり、まだ、熱中症が続いているんだ。宮本は残ったペットボトルの水を全て頭に掛けた。ぶるるる。体よりも心が震えた。

「本当に、助かったでござる。お礼を言うでござる」宮本は坂本に頭を下げた。宮本はようやく男がまだ落武者語？を使っていることに気が付いた。もうロケは終わったんだったら、普通に話せばいいのに。

「いやあ。お互い様ですよ。この暑さですから、誰でも熱中症にかかりますよ。僕もあやうく熱中症にかかりそうでしたよ」

「熱中症？」

「暑さで、体中の体温が上がる病気のことですよ。へたをしたら、死ぬかもしれませんからね」

「死ぬ。それでは、貴殿は拙者の命の恩人でござるな。何か恩返しをしたいでござる」

「恩返しだなんていいですよ」と言いながら、助手席の男の風体から想像される恩返しとは何だろう。坂本は想像した。鉄砲が撃たれ、矢が飛び交い、刀が振り回され、槍が付き合い、馬が走り回る合戦のさ中で、自分が落武者におんぶされている姿を。

冗談じゃない。今は戦国時代じゃないぞ。そんな恩返しなんかありえない。頭を振る。また、坂本は想像した。自分が切腹する横で、落武者が介錯のため刀を振り上げている姿を。冗談じゃない。何で、自分が自害しなければならないんだ。営業成績が悪いからか。そこまで、会社に恩はないぞ。頭だけでなく、体中を冷やさないと、この悪夢はおさまらない。

宮本はペットボトルを地面に直角にし、重力に任せるまま落ちて行く水を口で受け止めた。そして、最後の一滴が口の中にぽとり落ちた。

「ふう」ようやく落ち着いた坂本は落武者に

「さあ、家まで送りますよ。家はどこですか」と横を見る。

「家？屋敷でござるか。拙者の屋敷は戦で焼かれてしまったでござる。父上も母上も・・・」

落武者は言い掛けた言葉を途中で止め、うなだれると口をつぐんだ。

「そうですか」宮本は同情した。火事で家が焼けたんだ。ひよっとしたら、家族も全員火事で焼け死んだかもしれない。天涯孤独か。だから、こんな落武者みたいなかっこうをしているんだろう。事情はわかった。だけど、じゃあどうすればいいんだろう。自分はこの人に何ができるの
だろう。

「それじゃあ、僕の家にも行きますか。汚くて、狭いですけど」

つい、同情の言葉が出た。自分で言いながら、後からしまったと思った。見ず知らずの、しかも、落武者の姿の赤の他人を自分の部屋に誘うなんて。あり得ない。でも、今の、この状況では、そう言うしかない。龍馬も、もし、生きていたら同じことをしただろう。

父から、いつも「龍馬のようになれ。龍馬のようになれ」と言われ続けていたので、なにか判断に困った時には、いつも、龍馬ならどうしただろうかと思うのだった。この人をこのまま車から放り出せば、また、熱中症で倒れるだろう。それに、ありえないけど、ありえたように見えた、石になるかもしれない。それは、この人の意志ではないだろう。それこそ、今度は医師を呼ばないといけなくなる。

「かたじけないでござる」落武者が素直に頭を下げた。

「じゃあ、行きますか。その前に、ちょっと」坂本はズボンのポケットから携帯電話を取り出すと「すみません。まだ、お得意さんと話をしているので、帰社はもうしばらく時間がかかりそうです」と会社に連絡をする。

「誰と話をしているのでござるか？」落武者が顔をこわばらせながら坂本を驚いたように見つめる。

「ああ。会社の上司にね。今から僕の家に行くので、時間の帳尻を合わせないと怪しまれるからね」

「そうじゃなく、その四角い小さな赤い箱の中に、誰か隠れているのでござるか」

「四角い箱？ああ、携帯電話のことですね。お名前をなんて呼べばいいですか。まだ、自己紹介をしていなかったですね。僕は坂本虎雄です」坂本は、落武者の携帯電話への突っ込みに対しても、知らないふりをしてわざと言っているんだと思い、さらりと交わり、落武者に握手しようと手を出した。

「拙者は、宮本七蔵でござる」

落武者はそう名乗ると深々と頭を下げた。宮本七蔵。その名前を聞いて、宮本は自分の名前の事はおいて、ぷっと吹き出しそうになった。慌てて口を手で押さえる。剣豪宮本武蔵を意識しているのだろうが、さすがに武蔵と名乗れないから、七蔵と自称しているのか。

よく、有名人の生まれ変わりだと標榜している人がいるけれど、その点では、七蔵さんはそこまでは思い込んではいないらしい。少しは節度がある。病気はそんなに重度じゃないのだろう。火事で家が焼け、家族も失ったんだ。強くありたいと思う気持ちはよくわかる。何しろ、坂本も名

前は虎雄だ。繰り返すようだが、両親が坂本龍馬の大ファンで、龍に対抗して大物になるように虎という名前をつけたのだった。だが、名前負けしてか、坂本龍馬のように「日本を洗濯する」どころか、自分の洗濯物も一週間に一回の割合だ。

「宮本七蔵さんですね。よろしくお願いします」

「こちらこそでござる。しかし、先ほどの、ブルドーザーでござるか、この時代の馬は変わっているでござるな。それに、この馬は背中に乗るんじゃなくて、中に乗るのでござるな」

宮本は車の中をじろじろと眺めながら、手で触る。

「この時代ねえ」火事でこの人の頭の中も焼かれたんだ。だから戦国時代に生きていることにしているんだ。悲しい思い出は消さないといけない。でも思い出が消えると自分も消えてしまう。だから新たな物語を作る必要があるんだ。知っているけど知らないふりをする。そのことで、悲しい過去と決別できるんだ。坂本は宮本のことをそう理解した。

「さあ、着きましたよ」車は坂本のアパートの駐車場に着いた。到着したのはいいけれど、宮本の姿、落武者姿が問題だ。この姿は目立つ。近所の人に見つかると、あそこは変な人をかくまっている、と噂が立ちそうだ。事情を話せば分かってもらえると思うけれど、アパートの一軒、一軒を回って、宮本さんは火事に遭って、家族を失い、悲しい現実から逃避するために落武者の姿をしているんです、といちいち説明するわけにはいかない。

「ちょっと、車の中で待っていてください」鈴木は車から降り、部屋に入る。車に戻ってきたときには、腰におもちゃの刀を差し、頭には侍のかつらを被っていた。

「やや。坂本殿も武士でござったか」宮本が驚く。

「いや。そうじゃないんだけど、説明は後から。とにかく、僕の部屋へ」二人の侍がマンションに入って行く。ちょうど、同じマンションの住んでいる奥さんが向こうからやって来る。鈴木はわざと大きな声で「今日の会社の宴会の余興は準備万端ですよ。後は顔のメイクだけですね」と横に並んだ宮本に振りをつけながら大袈裟に話し掛ける。

「宴会の余興？」何のことかわからない宮本は素っ頓狂な声を上げる。

「こんにちは！」坂本は奥さんに向かってわざとらしく、にこやかにあいさつをする。奥さんは口に手を当てて、下を向き、「こんにちは。お仕事、大変ですね」と返事をしてくれた。坂本はほっと胸をなでおろしながら、エイヤ、とおもちゃの刀を振り回す。奥さんは笑いをこらえ切れないのか、足早に立ち去った。

「先ほどの女は、坂本殿の敵でござるか。それとも味方でござるか」宮本が去って行った女の背中を振り返りながら小さな声で尋ねる。

「いや。敵ではないけれど、敵になるとうっとおしいから、先に仕掛けたんだよ」

「それはどういう意味でござるか」

「その話は部屋に入ってから」